

Society for Kano Regional History / Society for
Gunma History and Folklore (ed.), Region,
Exchange and Living: Kaga, Noto and Joshu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062411

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



加能地域史研究会・群馬歴史民俗研究会編

『地域・交流・暮らし』

―加賀・能登、そして上州―

林 亮 太

能登願成寺所蔵大般若経六百卷と江戸・高崎

(寺口学)

加賀前田家の中山道通行と上州安中宿の対応

(秋山寛行)

葬式と赤飯

―石川県と群馬県の事例から―

(板橋春夫)

医療民俗学の創設

―根岸謙之助と長岡博男の業績から― (鈴木英恵)

〈総括と展望〉

加能地域史研究会の来し方と行く末

(石田文一)

あとがき

(木越祐馨)

本書は、加能地域史研究会創立四〇周年事業として行われた、同会と群馬歴史民俗研究会との合同研究会の成果を記録したものである。研究会は、二〇一六年九月に「石川ラウンド」が、翌年三月に「群馬ラウンド」が開催された。構成は次の通りである。

はしがき

(板橋春夫)

開催プログラム

〈基調講演〉

加賀藩の参勤交代と上州路

(東四柳史明)

加賀・能登から上州へ―近世における交流の一齣―

(佐藤孝之)

〈研究報告〉

上州七日市藩主前田利孝の再検討

(鎌田康平)

以下、基調講演・研究報告・総括と展望の内容を簡単に紹介していく。

東四柳史明「加賀藩の参勤交代と上州路」は、加賀藩の参勤交代時における、同藩と上州路とのかかわりの事例をまとめたものである。事例として、上州において藩主が小休みと宿泊をした場所、一代藩主治脩の日記から参勤時における上州での様子を示したものがあげられている。また、高崎にある長松寺が、金沢にある前田家の菩提寺天徳院へ宛てた書状の下書きについても紹介している。その内容は、天

保期以来、長松寺が加賀藩主の休息場所になっている縁を理由に、寺を修復するために加賀・能登・越中の領民、及び前田家中に三か年間、勸進してまわることの許可を前田家に認めてもらえるよう、天徳院にその仲介を願ったものであった（実際に行われたかは史料がないため不明）。このほかにも、いくつかの事例から加賀藩と上州との関係を示している。

佐藤孝之「加賀・能登から上州へ―近世における交流の一齣―」は、加賀・能登、さらに越中を加えた加能越地域から上州を含む関東にやって来た「鏡磨ぎ」と、能登から上州にやって来た「漆掻き」について論じたものである。かつて銅製だった鏡は、時間経過とともに曇りが生じた。それを除くには、鏡面を磨く必要があった。鏡磨ぎ職人は、能登や越中氷見から上州や江戸に出稼ぎに来ており、彼らは生活必需品などを中心とした小間物の行商もあわせて行っていたという。また、下仁田道にある西牧開所を通り、上州へ入った者を記録した史料の元禄六年（一六九三）分の中から鏡磨ぎ職人を抜き出すと、氷見の職人が一番多く、次いで金沢の職人という結果がみられることを指摘した。その通行時期は、一月が最も多く、これは冬稼ぎにあたること述べた。一方、漆掻きとは、漆木からヘラを使って樹液を採取すること、ま

たはそれに従事した職人のことをいった。能登をはじめ北陸地方、上州南西部の山間地域では漆生産が盛んであった。漆掻きについては、金銭トラブルに関わる二つの事例を紹介し、それらの史料から、漆掻きの所持品一覧を示し、彼らはそれなりに財産を持っていたこと、漆掻きは三月に上州に来て、一月に能登に帰るというサイクルであったことなどを指摘した。

鎌田康平「上州七日市藩主前田利孝の再検討」は、七日市藩主の初代前田利孝、及び七日市藩と加賀藩の関係について検討したものである。利孝が、二代將軍秀忠に小姓として仕え、幕府寄りで旗本的人格をもっていたことに注目し、それが秀忠政権による諸大名統制が行われるなか、上州内では大坂の陣の戦功による唯一の新知拝領大名になり得たことに影響していた可能性を指摘する。また、加賀藩から派遣された家臣が七日市藩で家老になったことや、利孝の子孫が加賀藩士になったことなどを紹介し、両家の関係を示した。

寺口学「能登願成寺所蔵大般若經六百卷と江戸・高崎」は、願成寺（石川県鳳珠郡能登町内浦地区に所在）所蔵の大般若波羅密多經の表紙裏、背表紙裏、収納用筆筒に書かれている、經典購入資金を施入した者を分析対象に、この經典が同寺

に所蔵されるまでの経緯を明らかにしたものである。文化一二年（一八一五）〜文政二年（一八一九）頃にかけて施入が行われ、最も施入者が多いのは江戸であり、それに次いで高崎での施入者が多いことは、そこに記載されている人物は武士のほか、町人などがいたことを指摘している。また、高崎に施入者が多い理由については、江戸に住む高崎出身者から高崎在住の親戚の紹介をうけたこと、高崎は江戸からの帰り道にあたり、日程的に都合が良かったことなどをあげている。

秋山寛行「加賀前田家の中山道通行と上州安中宿の対応」は、前田家の参勤交代時における安中宿・坂本宿での休泊の事例を用いて宿場側からみた大名通行の実態と、同家の通行が安中宿や周辺町村に与えた影響を明らかにしたものである。安中宿の事例では、献上品・下賜金の実態を明らかにし、坂本宿の事例では藩側と宿場側で三か月程前からやり取りがあったこと、宿場での経費の相場について宿場側から提示があり、詳細な明細が作成されていたことなどを指摘した。また、前田家の通行が宿場やその周辺町村に与えた影響については、同家の安中宿夜間通行時における人馬継ぎ立ての失敗をふまえ、安中宿では助郷村への詳細な人馬触当の決まりが作成され、円滑な人馬継ぎ立てのため「城下

三町」（上野尻町・谷津町・下野尻町）との協力を藩に願い出る計画をするなど、宿場維持政策が模索されていたことを指摘した。

板橋春夫「葬式と赤飯―石川県と群馬県の事例から―」は、石川県・群馬県などの事例を用いながら、葬式における赤飯利用について考察したものである。一般的には、祝いのイメージがある赤飯を現在も葬式で用いる地域もあるが、その場合でも赤飯の赤色を薄くする、黒豆やインゲン豆を使う傾向があると述べる。これには、近代以降の彩色感覚（赤色⇨吉事、黒色・非赤色⇨吉事）の変化が影響しているという。

このことから、葬式における赤飯と慶事における赤飯の区別が近代化の中で急速に進んだと推測している。群馬県・石川県の事例については、群馬県の香典帳の記述から葬式当日、能登の香典帳の記述から中陰見舞い時（死後四九日を指す場合が多いが、石川県では初七日のことを指す場合もある）に赤飯が用いられていたと述べる。また、この赤飯を持参するのは、最も忌みがかるとされる近親者であったことも指摘している。

鈴木英恵「医療民俗学の創設―根岸謙之助と長岡博男の業績から―」では、医療民俗学の創設に関わった根岸謙之助（金沢市の眼科医）と長岡博男（群馬県で民俗調査研究を行

った者)の業績に注目し、両者の研究方法の特徴、医療民俗学が創設するまでの過程などを論じている。根岸と長岡の研究業績は、民俗学に医療分野の研究方法を確立させたこと、病いの治癒に呪術的な方法の調査研究を採用したことが両者に共通しているという。両者を比較すると、長岡は人々の生活文化から医療民俗学の研究方法を説き、医療民俗学を追究する基礎を築いたのに対し、根岸は民間医療の呪術的発想にもとづく伝承を民俗医療と呼び、そこに科学的医療技術・呪術的医療技術を発見したと指摘している。また、根岸については、人々の心意現象による医療的行為を技術伝承と捉えたことで、俗信から民間医療へと変化した医療民俗学の特徴を示したとまとめている。

石田文一「加能地域史研究会の来し方と行く末」では、創立四〇周年を迎えた加能地域史研究会のあゆみと、本書のもととなった共同研究会を開催するに至った経緯などをまとめている。

以上、簡単に本書の内容を述べた。加賀・能登(石川県)と上州(群馬県)という遠くはなれた地域ではあるが、見方によっては共通性、交流の諸相がみられることを本書は教えてくれる。今後の両研究会の発展を祈願するとともに、本書の一読をお勧めし、拙い紹介を終えたい。